

田中法生（監修）・水草保全ネットワーク（著）

## みんなが知りたいシリーズ 10 「水草の疑問 50」

みんなが知りたいシリーズ 10 冊目として水草が取り上げられました。藻類研究者、特に海藻研究者にとってあまり関係ない生物かな、と思っておりました。水草と藻類が関係ないと言っても、同じような場所に生えることが多いので、藻類採集の際によく出会う植物です。本書を一旦読み始めると、はまってしまい水草の世界に魅了されます。ごく自然に湧いてくる疑問を丁寧に解決してくれます。

ハスとスイレンの違い、ハナショウブとカキツバタとアヤマのの違いなどの初歩的な疑問から、タヌキモやムジナモの捕虫の仕方のようなマニアックな疑問まで、素人にもハイアマチュアにも、痒いところに手がとどくような読み物です。4つのパート、「水草の基本」、「水草の生態」、「水草の環境・減少する水草」、「水草を利用する・楽しむ」、に分かれています。

私は学生をつれて南西諸島の海を潜ります。初めて海中の光景を見た学生は、それに取り憑かれてほぼ全員がリピーターとなります。水の中では水中生物も自分自身も無重力で漂っている感がなんとも言えず心地よいのです。

本書には海草のことも取り上げられています。さらに海草を「うみくさ」と読んだ方が、海藻「かいそう」と区別できるということに同意していただいたのは誠に嬉しい限りです。

夏の風物詩とも言える西表島のウミショウブの受粉はなんとも不思議です。先日、本種の水面媒というのは風媒ではないのかと指摘されました。水面に浮いた雄花が風力で雌花に行き着くからですが、とりあえず水媒でいいのではないかなどと学生と議論し、とても楽しい時間を持つことができました。

三大栽培困難水草が海草、バイカモなどの湧水性沈水種、カワゴケソウであることを初めて知りました。水草だけでなく、私たちの身近にはない環境に生育する生物を人工的に育てることは、人間の知恵ではまだ完全にはできないということです。

興味深い話題として、東北の大津波で多くの水草の絶滅危惧種が出現したことがあげられています。環境の攪乱により残存種子が発芽し群落を作りました。自然に起こる攪乱により生物の多様性が維持されていることを実験したようなもの



成山堂書店  
四六判 268 ページ  
2018年10月  
定価：1,600円＋消費税  
ISBN：978-4-425-98331-5

です。ヒトが環境を改変することでいかに多様性が減少しているかを語っています。多くの水草が絶滅に瀕しているのは、全国の水環境を改変してきた我々に対する報いともいえますが、できるならば、これ以上の開発をおさえて水草の生育する場所をそのままそっとしてやりたいものだと思います。

綺麗なカラーの口絵がもっと多ければよかったですね。

田中次郎（東京海洋大学名誉教授）